

令和元年6月21日現在

機関番号：32513

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15908

研究課題名（和文）クリティカルケア領域における死別体験をした遺族支援プログラム開発の挑戦

研究課題名（英文）An attempt to develop a bereavement support program for those who have experienced separation by death in the area of critical care

研究代表者

西開地 由美（Nishikaichi, Yumi）

秀明大学・学校教師学部・その他

研究者番号：50712725

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の精神的健康状態と影響する要因を明らかにし、遺族支援プログラムを開発することである。クリティカルケア領域で死別体験をした遺族5名、遺族を支援する専門職者7名を対象に、半構造化面接調査を実施した。遺族は、不安と不眠あるいはうつ傾向により心療内科への通院歴、または催眠薬や抗うつ薬の服用歴があった。さらに、遺族は家族や親族以外の者に支援を求めている実態があり、社会的支援の不足等が精神健康状態に影響を与える要因であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅や緩和ケアの遺族に関して、教育的介入を含んだ遺族支援プログラムは、近年盛んに実施されているが、クリティカルケア領域の遺族を対象としたものではない。クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の精神的健康状態は、身体的・精神的・社会的要因が影響しており、遺族ケア構築に向けて、高齢者世帯と核家族化の増加、近隣住民同士の交流減少等、社会構造の変化に対応した取り組みが必要である。

本研究により、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族支援プログラムを開発することは、遺族の生活の質を高めることができ、さらに、遺族を支援する専門職者としての知識・技術を身につけ、質の向上に資することができると思われる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to elucidate the mental health status of the bereaved who have experienced separation by death, and the factors affecting such a status. The study also aims to develop a bereavement support program. A semi-structured interview was performed with five people who have experienced separation by death in the area of critical care, as well as seven professionals who are providing support to the bereaved. The study found that the bereaved were suffering from anxiety and insomnia or depressive tendencies and had past histories of visiting a mental health clinic or the administration of sleeping pills or antidepressants. Moreover, it was found that the bereaved were seeking support from people other than their family or extended family. The study suggested that the lack of community support has been affecting the mental health condition of the bereaved.

研究分野：臨床看護学 重篤・救急看護学

キーワード：クリティカルケア 死別 遺族支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族は、突然の出来事であり、時間的制約の中で治療等の意思決定が患者の命に直結することが特徴であり、不安や抑うつ、外傷後ストレス障害(PTSD)を発症している(Lautrette2007)。遺族の精神的健康状態に影響する要因については、遺族の性別、患者との続柄、死の形態が要因であることが報告されているが、死の形態が異なるクリティカルケア領域で死別体験をした遺族を対象とした論文は少なく、それ以外の要因は一定の見解に達していない(立野ら 2011)。本邦では、2006年以降にクリティカルケア領域における複数の学会から終末期医療に関するガイドラインが出され、そのなかでクリティカルケア領域における終末期の基本となる考え方や、家族支援の必要性が示されている。

これまで死別体験をした遺族の支援は、緩和ケア領域では、9割以上の施設で何らかの取り組みが行われているが(高山 2008)、クリティカルケア領域では、数年前から一部の施設で取り組みが報告されているも(滑川ら 2007)、その報告数は少なく遺族支援の実施状況は明らかにされておらず具体的な支援を検討することが急務である。また、遺族を支援する専門職者は、専門的な知識や技術が必要であると認識していることが(立野ら 2009)、遺族への介入を躊躇する一因となっていると考えられる。近年の医療の高度化・専門化は、クリティカルケア領域で治療等の意思決定を困難にしており、遺族の精神的健康状態に影響することが予測される。したがって、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族支援プログラムを開発することは、社会の動向から非常に重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の精神的健康状態と影響する要因を明らかにし、遺族支援プログラムを開発することである。家族にとって精神的負担が大きいクリティカルケア領域で、死別体験をした遺族は高頻度で精神疾患を発症していることが報告されている。しかし、影響する要因を含めたその実態は十分に明らかにされておらず、遺族を支援する立場である専門職者の遺族支援に関する認識不足も指摘されている。

将来の医療費の増加、近隣関係の希薄さ、高齢者世帯や核家族化の一層の増加傾向を踏まえ、身体的・精神的・社会的要因を含めた遺族支援プログラムの開発は急務である。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族:以下の条件を全て満たした遺族を対象者とした。

20歳以上である

死別後1年以上経過し、喪失を乗り越えることができたと本人が自覚している

精神疾患の既往や認知障害の疑いが無い

研究協力に関して文書による同意が得られる

遺族を支援する専門職者:以下の条件を全て満たした専門職者を対象者とした。

臨床経験3年以上

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族を支えているあるいはした経験を有し、その

実践を語るができると推薦がある

研究協力に関して文書による同意が得られる

(2) 調査方法

研究者が作成したインタビューガイドに基づき半構造化面接調査を行った。

(3) 調査内容

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族:

対象者の属性

年代、性別、故人との続柄、死別後の経過年数

死別後、遺族の精神健康状態の経時的な変化(心療内科・精神科の通院歴、催眠薬や抗うつ薬の服用歴)

家族との死別後から現在までの生活状況について

喪失を乗り越えることができたか自覚できた時期と影響を与えた出来事について

家族との死別後、どのような支援があったのか

今後、どのような支援を求めているか

遺族を支援する専門職者:

対象者の属性

職歴、年代、性別、臨床経験年数、遺族支援の経験年数、終末期ケアに関する研修の受講経験の有無

遺族ケアの内容

遺族ケアについて感じたこと、学んだこと

今後の遺族ケアの取り組み

各研究対象者の同意を得て録音し、逐語録を作成した。録音の同意を得られなかった者には、メモ、覚書を記録して、面接調査の終了後速やかに面接記録を作成し、メンバーチェックを受けて妥当性の確保に努めた。

(4) 分析方法

逐語録または面接記録を熟読し、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の精神健康状態と影響する要因、遺族が認識したケアの実態と支援ニーズ、遺族を支援する立場である専門職者が認識した遺族ケアを示す部分を抽出し、分析対象とした。

(5) 倫理的配慮

倫理審査委員会の承認後、研究対象者に研究目的、調査内容、自由意思による研究への参加及び途中辞退の保障、個人情報保護、結果の公表等について文書で説明し、同意書を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 研究対象者の概要

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族

研究対象者は5名(男性2名、女性3名)、年齢は30代~80代であった。研究対象から見た死別者の続柄は配偶者2名、母親1名、兄1名、子ども1名で、死別後の経過年数は1~15年であった。平均面接時間は55分であった。

遺族を支援する専門職者

研究対象者は7名(男性2名、女性5名)、年齢は30代~50代であった。職歴は保健師1名、助産師2名、看護師3名、臨床心理士1名で、遺族支援の経験年数は2年~12年であった。平均面接時間は75分であった。

(2) 分析結果・考察

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の4名は、不安と不眠あるいはうつ傾向により心療内科への通院歴があり、3名は催眠薬や抗うつ薬の服用歴があった。

逐語録をもとに分析した結果、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の精神健康状態に影響する要因として、抽出された36の内容から17サブカテゴリー、4【カテゴリー】を導いた。

遺族は【死別後の仕事・家庭内での役割と責任】において、仕事・育児・介護等何かに打ち込むことで悲しみや辛さを軽減していた。死別後、遺族は死別に際して後悔や罪悪感を感じながらも【故人に対する思いを表出することで心の解放】ができ、さらに【社会的支援の存在】が精神的支えになっていた。そして、遺族は自分一人で抱えていた悲しみが他者との関わり、すなわち【死別体験を通じた社会活動】を行うことで変化していくことを感じ、他者と繋がることが大切であることが明らかになった。

クリティカルケア領域で死別体験をした遺族の精神健康状態に影響する要因として、【社会的支援の存在】、【死別体験を通じた社会活動】等、遺族は家族や親族以外の者に関わりや支援を求めており、遺族を支援する専門職者が理解しておくことは、遺族自身のグリーフワークを促し、生活の再構築に向けた支援に繋がると示唆された。

今後、さらなるデータ収集、分析を進め、クリティカルケア領域で死別体験をした遺族が求めている支援を行うためのプログラムの開発を進める予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西開地 由美 (NISHIKAICHI Yumi)

秀明大学・学校教師学部・非常勤

研究者番号：50712725

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。